

死ぬ法

「人にはみな死あり」此の格言はたぶん確実であろう。なぜならわれわれは不死の人を見たことがないから。書物の上ではかつてそうした物、あるいは仙人と言ひ、あるいはストラルドブラグ (Struldbrug) ⁱ というものがいると言われたこともあるけれども、いずれも大した関係はない。だがわれわれはこの目で見たことがないし、北京学府の静坐の道友も又みんな布団を残して下山してしまい、凡人には飛昇を目撃する機会を与えようとしないから、本稿が印刷に付される時までには本人はついに暫く上述の格言を承認せざるをえず、死を生活の最後の一部とするのは、恋愛を中間の一部とするようなもので、——むろん、この両者が時には一箇所に並存することもあるが、これはもとよりかの原則を打破することはできない。仮にわれわれが死後にもまだ恋愛生活があることを信じないとしても。要するに、死は各人にみな分け前があるからには、その法も語ることができようというものだ。

世間の死に方の統計を取ると、全部で二大類あり、一を「寿正寝に終わる〔大往生〕」と言ひ、二を「非命に死す」と言う。往生の中は又三つに分けることができる。一は老衰、つまり俗にいう灯尽きて油乾くで、大抵みな「おめでた」である。というのはこの終わり方は八九十歳のおじいさんおばあさんでないとなれないし、彼らはその時必ずすでに四世同堂で、一家は一二百人に上る大々小々男々女々で膨れ上がり、実際いささか住みにくいから、彼の欠落は自ずととも歓送されるものである。二は突然死で、ある機関に故障が発生し、突然進行が止まる、ちょうど時計のゼンマイが切れたように、実は頭のとっぺんが陥没したのとそれほど違いはないのだが、これは内科に属するため、外からは痕跡が見えない。それで 正寝 ^{せいしん} の部類に入るのである。三は病死である。とても穏やかなように聞こえるが、実際多くはかの「秒生」 (Bacteria) 先生のいたずらで、様々な凶悪手段で、「蟻の命」を陥れるのである。早いのは一二日でまだ御慈悲であるが、あるものはまるで長期の拷問で、「東廠」 ⁱⁱ など比べ物にならず、まことに残虐の極みである。まとめてみれば、一二はいずれもまだ大したことはないが、長寿は求めて僥倖で得られるものではないし、心臓麻痺を希ったところでこれ又仙人になろうという困難と変わりはない。大多数の人の運命はやっぱりただ病死ということになる。これをわたしの苦を避け樂を求めるといふ意向からすると実に大いなる逕庭がある。だからよい死に方を手に入れようとするなら、われわれは往生を諦めてこれを非命に死ぬことに求めるほかない。

非命のよいところはそれが突然であるということにある。十五分前には明らかにまだ生きていたのが、十五分後には伸びて死んでしまう。たとひ苦痛があつたとしても（わたしはあまり信じないが）ただの十五分だ。これはそれにしかないよいところである。だがこれも一概には言えない。十字架はローマが奴隷を処刑する刑具で、十字架に釘付けにし、生きながら餓死かまたは昏倒死させ、おそらく何日かは生きながらえる。火あぶりは中世の護教者が異端に対処したもので、その時炙られて堪え難いばかりか、後にもバラバラになった体が残りに、あまりよくない。車刃に斤〔斬首〕はもともととてもさっぱりしていて、外国貴族の特権で、中国の好漢の歓迎する所でもあるのだが、ポツンとある頭は、西瓜か、あるいは「文旦」のようで、ある友人が長沙

で見たところでは、あまり体裁が良くないようで、なぜというに人間の体としてあまりに型に外れているのだ。金を呑んだり苦汁を飲むのも、いずれもいささか女々しいところがあり、阿片を吸うのもあまりに名誉を損ねることになって、人から阿片中毒呼ばわりされる。たとい生前に「芙蓉城主と解けぬ縁を結んだ」ことがなくとも、砂を抱いて自ら沈むのは、先に屈大夫〔屈原〕があり、後には……があるが、すこぶる英雄の気があるものだ。ただおそらくあまり長く浸かっていると、魚やスッポンの親しむ所とならずとも、咳を治す薬の「胖大海」〔アオギリ科の樹木のタネで、乾燥したものが水分を吸うと海綿状に膨れ上がる〕のようになって、すこぶる風趣にかける。首吊りはとても気持ちが良いということだが、（注意：これはただ“ということだ”であって、真偽はどうかはわたしは保証しかねる）、有島武郎と波多野秋子はこうして死んだ。ある日本の文人は冗談半分に、みんな自殺しようとするならこの方法に限ると言ったことがある。しかしわたしからすればやはり大きな欠点がある。何かの本に首吊り幽霊がコックリさんになって詩を題したと云う。

「目は魚眼の如く四時開き、
身は懸旌の若く終日掛かる。」

（はっきり覚えていないので、待考。この二句は、実際あまり聡明でない、おそらく受からなかった秀才が作ったものだろう。）又イギリスでは昔盗賊を処刑したそうである。そいつを台に掛けて、風が吹いた時には骨がカラカラ鳴る、（こうした話はむろん全部は信用できない、というのは盗賊は皆鎖骨ではあり得ない、しかしながらこのようである「そうだ」から、わたしも無理に反対するのは具合が悪い）、いささかダンセニイ卿（Lord Dunsany）の小説の風味があるけれども、どうしても怪異に過ぎる——ちょっと度が過ぎていようである。あれこれ考えても皆あまりよろしくない。そこで最後に銃殺を思いついた。銃殺、これは現代文明の中では最も理想的な死に方ということになるだろう。それは実は丈八の蛇矛でずばっとひと挿しのようなものだが、もっと文明的である。つまりもっと便利だということで、張翼徳でなくても使え、しかも同様に広く多く使えるのだ！体には一つ穴が開くだけで、中の機関は少しも壊れない。タンポポの白い汁のような赤い水が流れたら、それでお終いである。なんと簡単だろう。簡単はすなわち安楽であり、これはどんな病気よりもずっとよい。三月十八日中法大学の学生胡錫爵君が執政府で殺され、学校で追悼会を開いた時、わたしは一副の対聯を送った。文に言う。

「なんたる世界、まだ愛国を講うのか？
此の如き死に法、仙に成るに抵得る！」

この一聯は実にわたしの衷心からの頌辞である。もし美中に足らざるありと言うなら、弾があまりに大きかったことで、皮肉をひと塊り剥ぎ取っていたのが、やや目に触ったことだ。もし鳥撃ちの鉄砂のようなものを発明できたら、撃ち抜かれても一本太い銅線のような跡しか残らず、そうなればもっと申し分がない。思うにこうした発明はたぶんそれほど難しくも費用も時間もかからないだろうから、成功した時には、酸っぱいミルクを飲んだメチニコフ（Metchnikoff）医師が言った人間の「死欲」もきつとすでに発達していようから、その時は本当に「これを合すれば双つながら美なり」と言うことができよう。

わたしがこの文章を書いたのは、あるいは少し正岡子規の俳文「死後」の暗示を受けたかもしれない。だがこの話と考えはすべてわたし自身のものである。又上文で述べたことはあるものは冗談であり、あるものはそうではないことを、併せて声明しておく。（民国十五年五月）

案ずるに、言う所の俳文「死後」はすでに張鳳舉先生によって訳され、『沈鐘』第6期に載った。民国十六年八月編校時に再記す。

※初出：1926年5月31日『語絲』第81期

ⁱ Struldbrug スウィフトの『ガリヴァー旅行記』に出る若さのない永遠の不死の民の名前。

ⁱⁱ 東廠 明の成祖によって置かれた宦官による特務機関。特に魏忠賢がこれを利用して反対派を弾圧したのが有名。